

脳梗塞体験記

山本文子

十年以上も薬を飲むことなく元気に過ごしてきた私だったのに、遂にダウン、脳梗塞を発症してしまった。

二〇一六年、桜便りの聞かれる頃だった。夜の九時頃、自分の部屋で私は腰掛けていた椅子から不意にずるずると滑り落ちて、仰向けに床に転がった。あわてて起き上がるうともがいたが、立ち上がれない。大声で呼び立てたら、末娘が飛んできて後ろから私の上半身を抱えて引き起こしてくれた。左腕に違和感を覚えるので見ると、左腕がだらとぶら下がったまま動かない。右手で押してみると、ゆらりと重い。脳梗塞の発症だな、と気づいた私はその場にじつ

と座ったまま、救急車を呼んでもらって、その到着を待った。

ピーポーピーポー鳴らしながら走る救急車の中で、救急士が私の両腕と両脚を入念に調べた後、私の左手を握って「握り返してみてください」と言ったが、まったく反応できなかった。続けて救急士は言った。「あなたは軽くてよかったですね。もっと重い人が多い。死ぬ人だつてあるんですからね」この言葉はその後の私の心の支えになった。自分は軽いのだからめげてはいけない。頑張らなきゃ、と。搬入された救急病院で昼夜に亘る点滴を九日間受けた。

点滴の管から解放される日のなんと待ち遠しかったことか。

入院した翌日には、思いがけないことに左手指先がピクピクと動いたので、あつと思つた。そういえば、医学書には発症直後は安静にこだわらず一日も早くリハビリを始めた方が効果的であるとの記述があつたことを思い出した。ベッドに横になったまま私は自分で指先を動かす努力を始めた。グー、チョキ、パーを繰り返した。トイレに行こうと起き上がる度に左腕がずつしりと重いので、三角巾で吊りたいと思ひ、看護婦に申し出たところ、主治医の指示があるまでできないと言う。受診の日までなんて辛くてとても待てない。末娘に頼んで三角巾を用意させ、自分で左腕を肩から吊るしたところ、先生の許可がないのにと看護婦に叱られた。重さに耐えられないから私は看護婦の注意を無視して三角巾を外さなかった。自分は我儘な患者だろうな、とは思ふものの苦痛は一日も早く和らげたかった。

指先は一日目より二日目、二日目より三日目と日毎に動きが増していき、腕が少しずつ持ち上がるようになって、数日のうちに肘が胸の高さまで上がるようになった。左手にお茶碗を載せてみると、そのまま食事ができる。これはリハビリになるな、と気づいたので私は三角巾を外した。そうしたらまたも看護婦から注意された。「先生の許可なく外してはいけません」と。

なんとということだ。それではお茶碗が持てない。リハビリもできない。私は憤懣やるかたない心境になった。それだけではなかった。私は左腕こそ動かなくなったものの、脚の方は左右とも健全である。杖を使わずに歩ける。なのにトイレへ歩いていってはいけない、と車椅子に乗せられた。発作直後に歩くと再発とか悪化の恐れがあるのだろうか。それならそうと説明してくればよいものを。

点滴から解放され自分の脚でトイレに通えることになつて、やれ嬉しやと思つたら、今度は杖を使わなければいけないと指示された。これがまた厄介である。なぜならば杖などなしで歩ける身だから、杖を洗面所やトイレに置き忘れてきてしまう。取りに戻るといふことを何度繰り返したやら。私は馬鹿馬鹿しくなり、腹が立ってきた。そうは言うものの、職員の皆さんは笑顔いっぱいであつたから、自分は桁外れに我儘な患者だろうな、という自覚と済まなさは感じていた。

結局、救急病院では四週間お世話になり、いくらかのリハビリ治療も受けたりした後、ベッドの空くのを待っていたリハビリテーション病院に転院することになった。転院の日にはエレベーターの前や病院の玄関先でリハビリの先生や看護婦が見送って下さったのには感激。涙が出た。

転院先のリハビリテーション病院ではベッドが百五十余あり、九十余名の療法士を擁して、リハビリの質が抜群に優れていると私は感じ取った。毎日一時間のリハビリを三回、計三時間受ける。お陰で私の腕は万歳ができるようになった。上方向だけでなく、横にも後ろにも回り、ぐるぐると回転させることも可能になった。

リハビリの質が高いだけではない。この病院には愛情が溢れている。病院の廊下で行き会う人たちはスタッフも患者も会釈を交わし合う。にっこりと微笑む人もあって和やかだ。リハビリのお世話になった先生方は顔を覚えていて下さって、どこで出会ってもにっこり笑い、中には握手を求めてくる人もある。若い男性の先生は特にふざけて冗談で患者の心を和ませることが上手である。

「山本さん、近所のゴミ拾いをしていたんだってね。道理で私が〇〇町（著者の住む町）を通ったら、ゴミ一つ落ちていなかった」と言うHT先生の言葉に、私はお腹の皮をよじらせて笑ってしまった。

「山本さんは色が白いですね。何か塗っていますか。何も塗っていない？ 若い時からずっとなの？ その方がいいのかも知れませんか」さらに

「山本さんの笑顔は実に素晴らしい」はTM先生の言葉。

の秘訣はここにあるのではないか。見つめ合う。重ねて和やかな笑顔。握手。さらに抱擁。その上での心を開いた会話。これらは世界共通の友好表現であり、人類にとつての最高の幸せ、平和を守る手段ではないか。平和を守るために必要なのは決して軍備ではない、とつくづく思った。

各階毎に食堂がある。脳梗塞患者は歩けない人が多い。

食事時には車椅子の人たち三十人ほどが集まってきて食卓を囲む。この人たちは食べ物や飲み込み力が弱くなったり、箸を使えなくなったり食べるのに時間がかかる。歩ける人は稀な中で歩き回っている私は食事も一番早く終わるのでどうしても目立つ。看護婦が近寄ってきて「山本さん、あなたはどうしてそんなに元気なのか秘訣を知りたいから会わせて、という患者さんがいるよ」と一人の女性患者に引き会わされた。その人の手を握ってみると、指先は動かせるのに動かそうとしない。私は自身の努力が必要なことを話してグー、チョキ、パーに毎日励むよう勧めた。私が食堂に姿を見せるといつもすがりつくような目で車椅子の上から私を見つめる女性患者がいる。その肩に手を回して私が「頑張つてね」と声をかけると、じわーっと涙を浮かべる。辛いだろうな、歩きたいだろうな、と思うだけで私まで涙が込み上げてくる。その他に三度の食事時に車椅子で食堂

「単純な私は「えっ、私の笑顔が素晴らしいって？」と嬉しがって洗面所の鏡の前で一人でニッと笑ってみたりした。後で、先生の褒め言葉は病人を励ますための、つまり心のケアだったと気がついた。オメデタイな、私は。」

「山本さんは本当に元気だね。百二十歳まで生きられるよ」なんて言われる筈だ。

「もっと若い時に知っていたら、ボク、山本さんに惚れてしまったかも知れない」と見事にふざけてみせたMF先生は、ひょうきんで面白い若者だ。そういう私は口軽婆さんか。「先生たちは孫のように可愛い」と言ったら、すかさずにつつと手を突き出して「お年玉頂戴」と言った先生とは漫才のコンビが組めそうだ。

「山本さんが歩けなくなったら、私が抱っこしてあげる」とHM先生。冗談と思ってもその優しさが嬉しい。退院の日には

「もう私が抱っこする必要はなくなりましたね」と祝福して下さった。

じつと私の目を見つめて視線を離さずリハビリを続けてくれる先生があつて、私はその目に心を引き寄せられそうな自分を感じた。自分に注がれる視線は眩しい。その温かい視線は人の心を引き寄せる。そこで気がついた。人の和へ集まってくる患者のうち、表情の暗さから私の心にかかっている人がある。声を掛けると硬い表情のまま頷くだけだったその人がやがて私の言葉に答えるようになった。いまに笑顔も・・・と思っているうちに私が退院してしまつた。会いたいな。あの人たちは今どんな思いでいるのか。どうか明るい気持ちになって欲しい。

入院生活を笑って楽しんで生きている人など滅多にあるものではないが、この私は入院中もケラケラとよく笑つた。お腹の皮がよじれるほど笑つた。なぜ笑えるのか。私とはかく今こうして生きているということが嬉しくてたまらない。病んだ時、人の心が暗くなるのは病気を案じ死を恐れるからであろう。私にはその恐れがない。死を恐れる人たちにどうしたら私の考え方を伝えられるのか。死は現世以上に素晴らしい霊界への移動である。恐れるどころか、楽しみにすべきことなのだ。

結局、このリハビリテーション病院には六週間お世話になった。温かい先生や看護師たちに見守られての六週間は実に楽しかった。退院の日、主治医のMS先生は左手で私の右手を握り、右手で私の左手を握りしめて下さった。リハビリによって復活した私の指の力を確かめたくてのことであろうか。そこに私は先生の温かい心を感じて嬉しかっ

た。「忘れられない楽しい入院生活でした。ありがとうございまして」と言った私の言葉に対する先生のコメントが振るっていた。

「私のこんな顔でもよかったら、思い出して下さい」

大きな目をぎよろりとさせて、口元をほころばせたMS先生の顔は最高に魅力的だった。

何人もの先生が、私の回復の速さを驚き感心して下さったけれど、私としては自分が他の患者よりの程度に速いのか見当がつかない。訊いてみても、「人それぞれ。千差万別ですよ」の答えしか返ってこない。

「山本さんの回復の速さには不思議現象の一つかも知れませんがね」と言ってお下されたSD先生の言葉には感動。リハビリを受けながら私がしゃべった自分の不思議体験を大抵の先生は軽く聞き流してしまふ。けれども、SD先生は真剣に受け止めて耳傾けて下さったのだ、と思うと本当に嬉しかった。思考が深く温かい人に違いない。長身だけれど心はとても細やかなSD先生とはもつともつとお話をする機会が欲しかったなあ。

脳梗塞は脳神経が冒されるため、手足だけに限らず、話す能力や記憶能力、思考能力が衰える場合もあるから、言語リハビリ担当の先生から患者はあらゆる角度からの質問

いるので強く感動した。それに較べて日本側のメッセージは表面的なありきたりの平和論に過ぎず、お粗末に思えた。退院後の私は、リハビリ担当のTM先生から頂いた自主トレメニューを自分の部屋の壁に貼って、そこに書かれたリハビリを毎日実行している。つま先立ち運動、お尻突出しての膝曲げ運動、また寝た姿勢での腰上げ運動や脚上げ運動に加えて、毎日三十分ほどの散歩を心がけている。

脳梗塞は人間の体が地震を起こしたようなものに思える。微震だと思った私なのに、どうやら影響は全身に及んでいたらしい。発症と同時にぼったりと夢を見なくなったことや、ピロウな話で恐縮だが、沈黙のおならしか出なくなることからそう感じた。発症後八十七日目から夢を見始めて「脳の復活だ」と喜び、五か月ぶりに音が出たときは「腸の復活だ」と喜んだ。なんでも喜びの種になる私である。だが、この先も復活への道一筋とは限らない。予震の後に本震が来るように、脳梗塞は再発がかなり多いと聞く。再発を防ぐことができれば、リハビリに励むことで手脚の筋肉が鍛えられ、結果的には足腰を強めて長命に繋がるかも知れない。よく体を動かさし、心を安らかに保つことによつて再発を防ぎたい。

少し横道へ逸れるが、自分はいよいよ人生の終着駅に近

による検査を受ける。私は幸いなことにこの点には問題なく、担当のHA先生との面接は二回で打ち切りになった。一回目の面接には「今日は何年何月ですか？ここはどこですか？」に始まる質問で最後は趣味を問われた。書くことと答えたら、その内容を問われ、著書名まで問われた。次の面接でHA先生から「山本さん、図書館で調べたらありましたよ、あなたの本」と声を弾ませて言われた。拙著『改訂版 墓碑は語る』がアマゾンで定価五百円が五千元から五万円値をつけられていることが知れ渡り、これがため私は流行作家扱いされてしまった。『改訂版 墓碑は語る』の反応はすこぶる良かったが、中でも永六輔氏からは、「拍手！脱帽！」という身に余る賛辞を頂いた。この方のお力でアマゾンの値が吊り上がったのかな、という気がしている。

エレベーターの中で出会ったHA先生から「山本さん、読みましたよ。凄いわね」と声を掛けられて私は恥ずかしいやらきまり悪いやら。「また書いてね」とか「オバマ大統領の広島来訪時のメッセージに対する感想を書いてね」と言われたりした。それにはまだ応えていないので、代わりにここで簡単に一言で答えておきたい。オバマ大統領のメッセージは実に幅広い観点から深く掘り下げて語られて

づいたかなと思うたびに、懐かしく蘇ってくる二人の恩師の話に触れたい。まずは小学校一、二年の担任だった小川百合先生の九十歳頃の姿。「文子さん、お友達を誘って遊びに来てよ」との電話を先生から再度頂いたので、先生宅を級友四人で訪れたのは二十年くらい前だった。先生を囲んでのおしゃべり中に私の頬から金粉が出始めた。「あつ、文子さんの顔に何か光っている。また増えた」と平野富貴代さんが叫び、みんなが総立ちになって私を取り囲んだ。以来、私は同級生たちから霊能者扱いされるようになってしまった。小川百合先生からは「文子さんには神が宿っている」と言われた。この時の五人で今健在なのは平野富貴代さんと私の二人だけだ。小川百合先生は百歳まで自立を全うされた。私もそれにあやかりたい、と願っている。もう一人の恩師三年の担任だった梅村芳郎先生は昔、新聞の地方版に拙著『金粉のメッセージ』『詩歌集 蟻んこの独り言』の紹介文が顔写真と共に載ったとき、「あなたは宝です。大成して下さい。あなたなら出来る」とのお手紙を下された。大成から程遠いために私は梅村先生に顔を合わせられないから、まだ死ぬわけにはいかない。大成とは何ぞや。世の中に益する人間になること、と思っている。

(二〇一六年 九月二十四日)